

事例論文の講読と検討を中心とした授業実践について

学校臨床心理専攻・信原孝司

1. 授業の概要

臨床心理面接特論Ⅱは、心理臨床の専門性の中でも、特に臨床心理学における事例研究の視点から学ぶことを目的とした授業である。この科目は、臨床心理士を目指す大学院生にとっては必修の科目であり、履修者のほとんどが臨床心理士資格の取得を目指していることに特徴がある。

2. 導入

授業では、昨年度における学生の授業評価などを参考にして授業内容・構成を検討している。

まず初回では、授業予定を学生に周知徹底するようにしている。これによって学生は今後の見通しを持って授業に取り組み、事前に必要な分野を予習して習熟を深められる、等の効果を期待している。

今年度は、以下の授業内容で実施した。

授業回	水曜日 3時限目
1	オリエンテーション，クライアントにとって「役に立つ」とは
2	事例理解について
3	臨床心理事例 1 【 不登校 】
4	臨床心理面接 1 【 不登校 】
5	臨床心理事例 2 【 神経症 】
6	臨床心理面接 2 【 神経症 】
7	映画を通して臨床心理面接を考える I
8	ディスカッション
9	臨床心理事例 3 【 パーソナリティ障害 】
10	臨床心理面接 3 【 パーソナリティ障害 】
11	臨床心理事例 4 【 心的外傷 】
12	臨床心理面接 4 【 心的外傷 】
13	映画を通して臨床心理面接を考える II
14	ディスカッション
15	振り返り・レポート提出

3. 授業形式について

I. 1回目，2回目の授業は，授業実施者（以下，授業者とする）が講義形式で行った。

II. 臨床心理事例 1～4

臨床心理事例 1～5 は，以下の形式で行った。(1)学生の希望に沿って決めた担当グループが，担当テーマ（例えば「神経症」等）に関する先行研究論文などを事前に読み解く。(2)そのテーマに応じた発表レジュメをまとめる。(3)授業当日，担当グループが自分達の進行でレジュメに沿って発表し，ディスカッションを行う。

また，担当グループは，発表する前の週に，担当グループ以外の履修者へ事例論文を配布するように指示した。履修者はその論文を事前に読み込み，自分が考えたこと（ディスカッションしたいこと）を，A4用紙1枚にまとめて，次週の授業に臨んだ（レポートは授業終了時に提出）。

事前配布の事例論文は，日本心理臨床学会が公刊する学術雑誌『心理臨床学研究』から，力動的（深層心理的）アプローチの1事例を，担当グループが選ぶこととした。当日は事例理解のための情報や考察の観点，自分達の事例理解などをレジュメで提示し，履修者とのディスカッションを通して事例理解を深めた。

III. 臨床心理面接 1～4

臨床心理面接では，臨床心理事例での担当者グループの発表やディスカッション内容を踏まえて，授業者が講義形式で授業を行った。また，臨床心理事例の授業終了時に，授業者が選んだ事例論文を配布する場合は（毎回ではない），次週の臨床心理面接の授業時まで精読しておくよう指示した。

4. 授業内容について

1回目，2回目の授業，臨床心理事例，臨床心理面接，映画で取り上げた主な授業内容は，次の通りであった。

I. 1回目，2回目の授業

1回目は授業のオリエンテーションを兼ねて行

った。今後の授業の進め方の説明の後、クライアントにとって「役に立つ」心理療法とは？との問い掛けを学生に投げ掛け、前期の臨床心理面接特論Ⅰの復習も兼ねて、また後期授業の予定にも触れながら議論を重ねた。

2回目は、授業者自身が担当した事例論文を読み進めながら、ディスカッションを行い、事例理解の大切さ、意義などについて理解を深めた。

Ⅱ. 臨床心理事例

【不登校】

スクールカウンセラーとして不登校生徒に関わった事例論文の検討を注進し、不登校の現状、スクールカウンセラーについて、生徒の心理的内面等について、理解を深めた。

【神経症】

事例論文は自己視線恐怖に関する事例を取り上げ、その心理機制や、神経症と生育歴との関連について等、理解を深めた。

【パーソナリティ障害】

事例では境界性パーソナリティ障害に関する論文を取り上げ、パーソナリティ障害の定義、各種のパーソナリティ障害について、心理療法による援助等について、理解を深めた。

【心的外傷】

事例論文では性的虐待事例を取り上げ、PTSD概念について、その歴史的変遷、診断基準、主な症状、治療技法について等、理解を深めた。

Ⅲ. 臨床心理面接

臨床心理面接では、特に、臨床心理事例での発表で取り上げられなかった、あるいは希薄であった領域を中心に取り上げた。具体的には次の通り。

【不登校】

不登校概念の定義、不登校概念の歴史的変遷、不登校のタイプ例、不登校の経過例を取り上げた。また、登校刺激について問題提議し、講義とディスカッションを通して理解を深めた。

【神経症】

DSMと神経症概念の変遷について、神経症と心理的防衛機制について等、講義とディスカッションを行い、理解を深めた。

【パーソナリティ障害】

事例論文では、青年期境界例の中断事例について取り上げ、境界例と心理療法について、理解と対応、境界例概念について、境界例の理解モデルについて、講義とディスカッションを行い、理解を深めた。

【心的外傷】

PTSD概念について、その症状、歴史的変遷について、児童虐待について、心理的防衛機制としての解

離について、PTSDへの対応について、講義とディスカッションを行い、理解を深めた。

Ⅲ. 映画

映画は『Autumn Sonata』（邦題『秋のソナタ』）と『Another Woman』（邦題『私の中のもう一人の私』）を取り上げ、視聴とディスカッションを行った。また、レポートでは以下の課題を指示した。

『Autumn Sonata』

(1) 映画の感想

(2) Evaの人生を振り返り、彼女が抱えてきた心理的課題について、臨床心理学的に考察せよ。

(3) あなた独自の視点から映画を臨床心理学的に論考せよ。

『Another Woman』

(1) 映画の感想

(2) Marionの人生を踏まえ、彼女の対人関係のあり方の変化について、臨床心理学的に考察せよ。

(3) あなた独自の視点から映画を臨床心理学的に論考せよ。

5. 授業を振り返って

レポートでの学生からの授業評価を中心に、授業を以下に振り返った。

学生からのコメントでは、心理臨床で接することが多いであろう事例課題について学べることが出来て有意義であった、とのコメントが多かった。その一方で、多くのことを盛り込み過ぎ、特に担当グループでの発表時に時間が足りなかった、準備が不十分になってしまったとのコメントもあった。授業者としては、履修者の視点に立つと、授業内で取り上げる内容と、予習に必要な時間も合わせ、非常に盛り沢山な内容であったとも考えられたので、次年度以降に反映させたい。

授業形態では、授業者からの講義、担当グループの発表と授業者からの補足講義をセットにし、心理臨床課題を考える映画の視聴とディスカッションという構成への支持は多く、来年度もこの授業形態を継続したいと考える。

授業で取り上げる内容は盛り沢山だったが、学生達の予習もあって、ディスカッションは活発に行われた。担当グループを中心に学生自身で取り組んだ部分も多く、積極的な授業参加となったことは、授業者の意欲にも繋がる相乗効果があった。また、ディスカッションを通して、自分以外の多様な意見を知ることが出来たことについても、学生達のコメントでは多く評価されていた。